

～新年度を迎えて～

院長：家永 徹也

私たちは、皆さんとともに「学び」そして「成長」していきます！

春爛漫、美しい季節になりました。満開の桜に包まれ夢心地。先月、宮崎駿監督の10年ぶりとなる最新作『君たちはどう生きるか』がアカデミー賞長編アニメーション賞を受賞しました。宮崎監督の記憶に残るかつての日本を舞台に、自伝的要素を含む冒険ファンタジーで、生と死が渾然^{こんぜんいつたい}一体となった世界を旅する姿が描かれ、見ているうちに不思議な世界に引き込まれていきました。現実社会では、戦争や地震、政治問題などの理不尽なことが起こります。そういう中で、私たちは、いかに生きるかをしっかりと考えないといけないと思います。

素晴らしい人生を送るためには、私は人も組織も学び成長してゆかなければならないと思っています。愛仁会グループでは、その取り組みの一つとして毎年、業務改善活動に取り組んでいます。課題を設定し論理的思考により分析し、計画（Plan）、実行（Do）、評価（Check）、改善（Action）、いわゆるPDCAサイクルを回す方法です。論理的思考に慣れていなかったり、パソコンが苦手なスタッフもこれを機会にしっかりと学習しています。私はといえば、当然、医療の勉強はしておりますが、最近では、将棋、写真、ゴルフなど取り組みたいことが山積みです。

そして、当院の課題は、「どうすれば患者さんに寄り添った医療を提供することができるか」です。当院の役割である感染症予防のためのワクチン接種、病気の早期発見のための健診、生活習慣病の適切な治療と指導、患者さんの長期的な医療を相談し、健康増進を支援する地域包括診療、通院困難な患者さんの訪問診療など、今後、今まで以上に患者さんの要望にお応えできるような体制を整備しないといけません。今年度は新たな取り組みとして、オンライン診療や診療看護師（NP：Nurse Practitioner）の診療支援を考えています。また、勉強会や患者さんや地域の方々との交流会を開催し、皆さんのご意見を拝聴したいと思います。

質の高い医療を継続して提供するためには、医師のみならず多職種の専門性の高いスタッフを必要とします。高槻病院など他施設のスタッフや地域の方々のご支援をいただきながら、皆さんとともに「学び」、そして「成長」していきたいと思っています。今年度もよろしくお願いいたします。

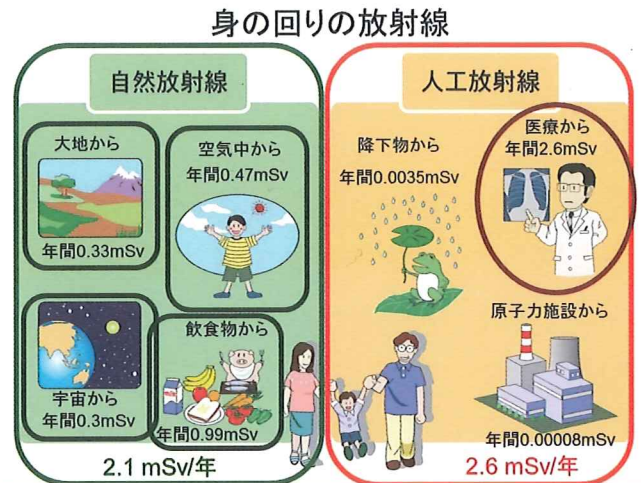


X線検査と被ばくについて

放射線技師：森一 智博

当院では、病気や骨折の有無を調べるためにX線検査を行っています。X線検査は撮影やCT、透視など、診断や治療法の決定に欠かせないものです。X線検査による被ばくについて、不安を持たれる患者さんもいらっしゃるかもしれません。しかし、当院で行っているような検査による被ばくで健康に被害が出ることはありません。

被ばくした量を表す単位としてmSv（ミリシーベルト）が使われます。mSvとは放射線が人に対して、がんや遺伝性影響のリスクをどれくらい与えるのかを評価するための単位です。国際的には、被ばく量が100mSvを超えると健康に何らかの影響があるとされています。私たちの身の回りには、自然放射線という大地や空気中、宇宙、飲食物からの放射線と、人工放射線という医療用放射線や放射性降下物、原子力施設からの放射線が存在します（図1）。自然放射線が2.1mSv/年、人工放射線が2.6mSv/年の被ばく量であると言われていることから、日常生活で被ばく量が100mSvを超えることは考えにくいのです。



当院では、症状により適切な検査機器、（東京都健康安全研究センターHP引用）（図1）検査手技を用いて被ばくが少なくなるように下記のような努力をしています。そのため、おおむね（表1）の値となり、低被ばくなので安心です。

当院での具体的な取り組み

- ・検査機器の性能を向上させ、被ばく量を減らす
- ・検査手技を工夫し、被ばく量を減らす
- ・検査の必要性を慎重に判断し、必要最小限の検査に留める

ご不安やご不明な点がございましたら、
お気軽に医師や放射線技師にご相談ください。

検査内容	被ばく量 (mSv)
胸部正面	0.1
腰椎2方向	7
膝関節2方向	0.4
CT 頭部	40
CT 腹部	20
胃透視（バリウム）	10
骨塩定量	0.002

（表1）

着任のごあいさつ

訪問診療部門の早川美緒と申します。ここでお仕事させていただくようになり早2年が経過しました。手術だ検査だという分野よりも慢性疾患の療養、管理の方に興味があり、20年近く前に医師になった当初は呼吸器内科医として仕事をしていました。慢性疾患（ほとんどの病気がこれに当たると思うのですが）は治療完了ということではなく、ほとんどのものが天寿を真つ当するまでお付き合いしていかなければなりません。自身の生活を損なわない程度に上手に病気とお付き合いする方法を考えることが何より大切と思うようになり、この10年は訪問診療の分野に携わらせていただいています。内服をただ続けるだけでは病気が上手にコントロールできない、体調不良にずっと悩んでおられる方などおられましたら、ぜひ訪問診療のご検討をいただければと思います。

